日文教育資料

教育情報

Educational information

2015 No.7

【特集】

02. 目標(夢)に向かって力強く
土屋ホームスキー部選手兼監督　葛西紀明

04. 建築家の仕事と社会貢献
建築家　坂 茂

06.「挑戦そして前進」
文楽の太夫　豊竹咲寿大夫

08. クローズアップ！ 教育の現場
未来に輝く子どもたちのために
熊本市教育委員会　中島幹記

特集

夢と挑戦、キャリア教育

日本文教出版Webサイト
最新情報はこちらから➡ 日文 検索

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

特集　夢と挑戦、キャリア教育

目標（夢）に向かって力強く

土屋ホームスキー部選手兼監督　葛西 紀明

SAJ27承認第00299号

世界も認めるレジェンド

ソチオリンピックの年、私は10年ぶりのW杯優勝を果たした。41歳7か月の勝利はスキージャンプ界の歴史を覆す出来事だ。私はオリンピックのメダルももうすぐだと思った。メダルの方からやってくる、そんな気がした。そして、ついにオリンピック当日がやってきた。朝食前に散歩に出て、遠くに広がるソチの山々を見ながらイメージトレーニングを重ねた。リラックスして過ごしたあと、午後からは軽い筋力トレーニングで体の調整。午後7時ごろ一人で会場に向かった。

いよいよ私の番の1本目がきた。助走、サッツのタイミング、空中姿勢、何もかもがイメージ通りだった。飛距離は139メートル、得点は140.6。2位につけた。

2本目。私は集中し、すべてがかみ合ってもいた。飛距離は133.5メートル、得点は136.8。最後の一人カミルを残して飛び終わった。そしてカミルは132.5メートルを飛んだ。結果は、2本目の飛距離も得点も、私はカミルをわずかに超えた。それでも1.5ポイントしか上回ることしかできず、わずか1.3ポイントの差で金メダルを逃した。金メダルに匹敵する結果だった。

「ク・ヤ・シ・イ！」と私は叫んだ。最大のチャンスだったので、本当に悔しかった。しかし、ついにオリンピックで初めての銀メダルを獲得した。うれしさがあふれるようにこぼれてきた。

私は７度目の、2014年ソチオリンピック後、3つの「ギネス世界記録」に認定された。「冬季五輪最多7度出場」、「41歳219日、W杯最年長優勝」、「ジャンプ種目の冬季五輪最年長メダル」の3つだ。こうして私はレジェンドになった。人は成功してもどこかでまた失敗するだろう。失敗し最下位に落ちても、諦めずに努力し続ければ必ずよみがえることができるのだ。

SAJ27承認第00300号
3つのギネス世界記録に認定された

もっと遠くへ、ジャンプとの出会い

私は、1972年、札幌オリンピックの年に北海道北部の内陸の町、上川郡下川町に生まれた。スキージャンプで有名な町だ。亡くなった母の話では、小学校に上がるまでは月の半分は病院へ通っていたほど病弱な子どもだったそうだ。小学校に上がるころからは健康になったので、山や川を飛び回っては、自然を相手に遊んでいた。父に勧められ、マラソンも始めた。冬はもちろんスキー。家の裏にあるスキー場にはジャンプ台が4つ設けられていて、冬になると、ここが遊び場だった。私の柔軟な体と足腰のバネは、下川町の自然に培われたようなものだ。

スキージャンプとの出会いは、小学校3年生の冬。友達に誘われてジャンプ台のスタート地点に立ったときだ。

「ウワァ！　怖いなぁ～」アプローチを見下ろしながら、友達と二人で叫んでいた。ものすごく怖いけど、飛びたい。怖いけど、どこまで飛べるのだろうっていう冒険心があった。結局、「よし、行っちゃおう」と着地の方法も知らないまま滑り降りていた。ほんの一瞬、空を舞っているような気分になり、ものすごく楽しかったのをよく覚えている。

初ジャンプで競技のおもしろさを知ってしまった私は、両親に隠れてジャンプを始め、どんどんのめり込んでいく。「もっと遠くへ飛びたい」、その一心だった。今でもフライングヒル競技は怖いが、あのときと同じ興奮に包まれる。「どこまで飛んでいけるのだろうか、どこまでも飛んでいきたい」と。

多くの人々に支えられて

ジャンプ少年団に所属し、下川町主催のスキー大

会に両親に内緒で出場した。小学校3・4年生部門で2位になり、ますますジャンプばかりの日々を送るようになった。そのころからジャンプ少年団の関係者が訪ねてくるようになり、両親を悩ませた。費用のかかる競技だということはよく理解していた。でも、私はやめたくなかったのだ。姉や妹は「スキー代にお金がかかるから、これからお小遣いやお年玉は無くなるからね」と母から言われていたと姉から聞かされた。母は一生懸命働いてくれていたし、姉も妹も何も言わず、ずっと私のジャンプを応援してくれていた。家族は、今も変わらずずっと陰ながら支え続けてくれている。

私は高校時代から札幌に出て、東海大四高のスキー部にお世話になった。住み慣れた下川町を離れ、札幌で寮生活だ。私自身、知らない人ばかりの札幌暮らしへの不安もあったが、よき指導者や温かい級友に恵まれ、快適な高校生活を送れた。なんといってもスキーの環境は最高だった。

上杉監督は世界を相手に競技することを勧めてくれ、高校2年から頻繁に海外遠征を行うことになる。このとき、私はすでに世界を見据えていた。改めて、支援してくれる人たちや級友たちに支えられていたのだと実感する。人は一人では生きることはできない。周りの人々の深い理解、協力がなければ物事は進まないのだ。今も、こうして飛び続けていられることに、本当に心から感謝したい。

新たな夢に向かって歩み続ける

いいことばかりだったわけじゃない。失敗ジャンプ、2度の鎖骨骨折、それに身内の不幸……。それでもアスリートなら、どんな試練からも立ち直らなければいけない。

紆余曲折はあったが、土屋ホームの川本謙社長（現副会長・スキー部総監督）との出会いで、私は変わることができた。川本社長は、全社員を巻き込んで社内でスキー部の後援会を作ってくださった。そして、どんなに業績がたいへんなときもスキー部を無くすようなことをせず、しっかり支え続けてくれたからだ。成績が残せないからとやめさせられるという不安から解放され、のびのびと安定した状況のなかで活動することができたのは大きい。素直な気持ちで厳しいトレーニングにも精を出すことができた。

また社長は、人として荒削りで未熟でガンコ者の男、非礼、無礼、失礼だったかもしれない私に、時には優しく、時には厳しく、時間をかけ、いろいろなことを教えてくださった。オリンピックでメダルを取ることができ、スキー部を支え続け、応援し続けてくれた土屋ホームの社員の皆さんや川本社長に少しだけ恩返しできたような気がしている。

メダルを取ってからは、また多くの人たちに出会い、スキー以外の多忙な日々を送ることになった。そして、今までとは違う景色を見ている。特に、社会人として礼儀作法、服装、所作、そして、言葉遣いなど、「学び直し」として考え、実践している。これからの新しい選手たちにも伝えていかなければと感じている。

でも、私にはもう一つ、「金メダルを取る」という仕事が残っている。人はいつも目標（夢）があるから力強く前に歩み続けることができるのだと思う。

可能性と夢は、いつも自分の歩いていく、すぐ前に残し続けていく方がいい。だから私はここまで来ることができたと思う。

今、金メダルは夢ではなく、超えていくものの一つだと思うのだ。

ソチオリンピックで川本副会長と女子ジャンプの応援に

著者プロフィール

● 葛西 紀明（かさい のりあき）

北海道下川町生まれ。小学3年生でスキーを始める。
2014年W杯最年長優勝（41歳7か月）。
2014年2月のソチ冬季五輪では個人ラージヒル銀、団体銅のメダルを獲得。
同年3月、W杯最年長優勝、冬季五輪7大会連続最多出場、冬季五輪スキージャンプ最年長メダリストの3つがギネス世界記録に認定される。
現在、土屋ホームスキー部選手兼監督。

写真：土屋ホーム

特集 夢と挑戦、キャリア教育

建築家の仕事と社会貢献

建築家 坂　茂

大工さんになりたかった

いつから建築家になろうとしていたのだろうか。幼いときに家に来る大工さんの仕事ぶりに興味を持ち、また、材木のかけらをもらっていろんなものをつくるのが好きだった。小さいときには大工さんになりたかったのだ。家をつくるのは大工さんしか知らなかったからだが、「建築家」という職業を意識したのは中学生のときであった。

当時、中学2年の技術・家庭科に自分の住む家を設計するという授業があった。夏休みの宿題ではその設計図をもとに模型までつくるのである。大部分の同級生がプランを立てるのにもたいへん苦労していたのに、わたし自身にはとても簡単に、楽にできてしまった。模型づくりも楽しかった。今も覚えているが、片方の屋根に勾配をつけた２階建ての住宅で、リビングには吹き抜けがあった。庭もつくり込んでいた。庭に植えた木をひねると室内の電気が点灯するような仕掛けまでつけていた。外壁にはさまざまなフェルトを貼り込んでいた。実を言うと、前年の1年生のときには近所の先輩の模型づくりの宿題を肩代わりして制作していた。2年生になって自分のプランを模型にするのが待ち遠しくてならなかった。それほど建物をつくるということに魅了されていたようだ。

「建築家」と「建築士」の違い

「建築家」と「建築士」を混同している人は多い。この違いは、料理の世界の料理人と調理師の違いに似ている。

「調理師」とは国家資格であり、一定の衛生知識などを有しているので、給食センターに勤務する際などには取得が必要とされる。また、飲食店を開店する際にも1名は調理師の有資格者が従事しなければならないらしい。そしておいしい料理がつくれなくても調理師の資格は取得できる。

一方「料理人」と名乗るのは、おいしい料理をつくることを目指し、またそれに自信を持つ者である。必ずしも調理師の資格は必要ではない。

「建築士」というのは調理師と同じで国家資格の一つであり、大学院を卒業すれば一級建築士の受験資格が得られる。「一級建築士」になるのが夢だと言う学生も少なくないが、現場での建築経験がなくても、机上の学問を修めていれば、建築士にはなれる。

「建築家」とはよい建築をつくることを目指し、またそれに自信を持っている者であり、料理人と同様、資格とは本質的には無関係である。建築を学ぶ学生には、建築家になるのを目指してほしいと考えている。

よい建築とは感動を与えるもの

ところで、おいしいものを食べたことがない人にはおいしい料理をつくることはできないのと同じく、よい建築体験のない人には、よい建築をつくることはできない。それでは、よい建築とはどんなものであろうか。

ひとことで言えば、訪れるたびに新たな感動を生み出す建築である。それが古民家であったり、数寄屋造りの住宅であったりする場合もあるだろう。職人の技がすばらしかったり、建築家の趣旨がはっきりとわかるものである。使いやすさばかりを追求したものでもないのが面白いところだ。

どこに感動するかは人それぞれだろうが、わたし自身は、気候や天気に呼応して、行くたびに違う体験ができるのが、環境と一体となったよい建築だと考えている。たとえば、ル・コルビュジエの設計したロンシャンの教会は、幾度訪れても、そのたびに新しい感動や発見がある。建築を目指す人はもちろん、そうでない人も多くのよい建築に

触れ，自らの中に建築体験を積み重ねていってほしいと思う。

仮設住宅建設に取り組む

建築家として社会全体のために役立つことをしようと、1984年のルワンダの難民用シェルターを皮切りに、地震などの自然災害で家を失った人のための仮設住宅の設計に無償で携わるようになった。地震で倒壊した建物により命をなくした人は多く、災害と建築家との関係は深い。しかし、被災現場には建築家の姿はないのが実情である。

多くの国や地域で紙管を使った建築を進めてきた。神戸やニュージーランドでは教会も紙管でつくった。紙管は世界のどこでも安価に入手できる材料で、もともと廃棄される運命にあったものの再利用だ。近年はエコロジーという視点でも評価されるようになった。紛争地や被災地での家づくりをする際には、必ず現地に行き、現地のパートナーを探す。そして、現地で調達できる材料や職人などのマンパワーを確認する。それが現地での雇用創出にもつながっている。

最近の例では、東日本大震災の被災者のために避難所内の間仕切りや仮設住宅の設計と建設をおこなった。わたしの設計する仮設住宅は快適な住み心地や美しさを追求している。仮設住宅は最低の基準さえ満たしておけばよいという認識があるようだが、被災者の忍耐強さやおとなしさにあぐらをかいた人権無視であろう。遮音性能、断熱性能を高くするだけでは不十分だ。大きな窓から見える風景や明るい光、室内を吹き抜けていく自然風などが、快適さの重要なファクターなのである。

具体例として、宮城県女川町のコンテナ多層仮設住宅プロジェクトがある。コンテナを利用した住宅については以前からアイデアは持っていた。この住宅はコンテナを市松模様に組んでいるので、安価で構造的にも強く、耐震性がある。また、多層化（3階建て）により、住棟間にゆったりと充分な空間を取ることができた。隣の棟を気にすることなく、窓を大きく開けることができるのだ。さらに敷地内には駐車場はもちろんマーケット（坂本龍一氏の寄付による）、子どものためのアトリエ兼図書館（千住博氏の寄付による）も設置することも可能になった。

仮設住宅に住む人たちは、さまざまなところから来た人たちで、いちからコミュニティをつくらねばならないので、このような施設の役割は非常に大きいものなのだ。

このコンテナ住宅に入居した人たちからは「地震の前に住んでいた家よりもいい」とか「ずっと住んでいたい」という喜びの声を聞いた。建築家は、住んでもらう人に喜んでほしくて設計をしている。高価な住宅であっても、仮設住宅であっても質的向上の追求に対する情熱、つまり愛情に違いはない。

大手ハウスメーカーのつくる仮設住宅と違うのがこの点である。つくる家や住まう人に対して愛情があるかどうか、それが住宅設計の質の違いにはっきりと現れるのである。

コンテナ多層仮設住宅プロジェクト
海上輸送用コンテナ／ 2011［宮城県］
既存のコンテナを市松模様に積み上げ、遮音や断熱性に優れ、高い居住性を有する多数の住宅を短期間で被災地に建設した。家族構成に合わせた複数の間取り、コンテナ間を利用した開放的なLDKも実現している。

著者プロフィール

● 坂　茂（ばん しげる）

1957年、東京生まれ。
高校卒業後に渡米し、大学で建築を学ぶ。大学を1年間休学し、国内の磯崎新アトリエに勤務。その後独立。住宅、商業施設、展覧会のパビリオン、文化施設などの他、世界各地の自然災害被災地で、住居を失った人たちへの仮設住宅建設を手がける。
2014年プリツカー賞受賞。

特集 夢と挑戦、キャリア教育

「挑戦そして前進」

文楽の太夫　豊竹 咲寿大夫

ぼくたちの、文楽

ぼくたちは円陣を組んだ。それは、体育館の舞台袖である。もうすぐ幕が開くのだ。照明はすべて落ちており、そばで先生が懐中電灯を照らしている。この先生は「学校の」先生である。今日の発表会に向けて、ぼくたちは四月から七か月間、夏休みも返上して毎日お稽古に明け暮れた。大丈夫、絶対に成功する。不安が夜の闇のように這い寄り始め、班長の女の子が啜り泣き始めた。リーダーが泣いちゃあ駄目じゃないか、と思いながらも背中を撫でて落ち着かせる。

「がんばろう」

誰からともなく、皆、それぞれにつぶやいた。

拍子木が高らかに体育館に鳴り響き、ぼくたちは舞台に繰り出す。舞台は二つから構成されている。正面の舞台と、舞台上手から客席側に張り出した花道のような「床」と呼ばれる舞台である。ぼくたちが足を踏み出したのは、床のほうだ。この床は、管理作業員のおじさんたちが組んでくれたものだと言っていた。魔法のようだった。

まず目に入ったのは、いつもは視界に入ってくることのない、スポットライトだった。夜の月のように煌々と輝いていた。そして、視線を下におろすと、一年生から五年生の後輩たちが「今から何が始まるんだろう」という目でぼくたちを見ていた。それもそうだろう。六年生が着物姿で、時代劇のような肩衣（かたぎぬ）と袴を付けて出てきたのだから。後輩たちの後ろには、児童の保護者や近所の市場で挨拶をするおじさんやおばさんがいた。紺色の制服、好奇心にあふれた視線、大きいはずなのに上から見ると小さい大人たち。それらすべてが、夜空のビロードを埋め尽くす星々のようだった。

床は特別製で、ひな壇のようになっていた。下の段に三味線を構えた児童が正座した。ぼくたち「太夫」は上の段である。見台という小さな机のようなものの前に正座した。しかもただの正座ではない。尻引きというお風呂の椅子に似たものをお尻の下に置き、爪先立ちをするかのごとく足の親指を立てて正座するのだ。これが、痛い。この尻引きも管理作業員さんが作ってくれた。ぼくたち一人ひとりの足のサイズを測って作ってくれたのだ。見台は、文楽の先生が本当の舞台で使っているものは漆塗りで重厚感のあるものだが、ぼくたちの見台は木で作られた譜面台のような雰囲気である。そりゃあ、先生は学校の先生じゃなくて本物の演者さんだもの、同じものは使えないけれど、手作りで挑む発表会はぼくたちの舞台なのだ。

ぼくは正面の幕が開くのを感じて、客席を見据える。

さあ、やろう。

ぼくたちの集大成だ。

これが、この高津小学校で学んだすべてだ。

伝統芸能、文楽。

ぼくたちの、文楽

私は恐ろしいほどに落胆してしまった

小学校の総合学習で文楽を学んだことが、私の羅針盤の方角を寸分の狂いもなく定めてくれた。能、文楽、歌舞伎と世界遺産にまで登録されている日本の伝統芸能のうちの一つを学んだにもかかわらず、私たちの中に、小難しくて古いものを学問している感覚はまったくもってなかった。なぜなら、私たちは文楽を経験したためである。実際の文楽の演者が小学校にやってきて、先生として私たちの演技指導をしたのだ。文楽というものが歴史に名だたる伝統のものであると習うよりも先に、近所の演劇としてその身をもって体験してしまったからである。受動ではない、能動の触れあいであった。

舞台を踏むということに、途方もない快感を覚えた私は、今しかないとばかりに文楽の世界に飛び込んでしまった。元来、物語が好きだった私は、将来の仕事は何かを表現できるものがいいと思っていたのである。中学一年生の冬には正式に芸名を頂戴し、豊竹咲大夫の弟子となった。

私は高校生になった。と同時に初舞台を踏ませていただいた。稽古のために授業を抜ける日々が続いた。にもかかわらず、私は学級委員長をやらせていただいたし、部活にも入っていた。三年間、実に理解も懐も深い担任と、顧問の先生に恵まれたものだと思う。彼らは私の仕事を知ろうとしてくれたし、それを使って同級生と比べることもしなかった。心から尊敬しているし、感謝している。

しかし、これまでひたすら真っ直ぐに、脇目も振らずに文楽の道を進んできたのかというと、実はそういうわけではない。

高校を卒業後、私は初めて東京公演と地方巡業を経験した。それまでは、東京に行くと何か特別な新しいことが経験できる、と正体のない期待に胸を膨らませていた。ゆえに東京公演を経験した後、私は恐ろしいほどに落胆してしまった。当たり前である、東京であろうと、博多であろうと、京都であろうと、文楽は文楽なのだ。

そうか、これから先、この生活スタイルのサイクルが宇宙空間で廻り続ける独楽（こま）のように同じ速度でずっと巡り続けるのか、そう気付いたとたんに私は自分の将来に疑問を覚えた。

もっと沢山の選択肢があるのではないか、と。

挑戦できることの幸福感といったら!

私は自分でも予想外の行動をとった。十九歳の頃である。文楽を、お休みさせていただいたのだ。今から考えると相当危険な行為だ。演者としての契約を抹消されてもおかしくない。けれども、私は子供の頃からこの世界しか知らなかったのが、たまらなく損をしている気分になったのである。

舞台に出ない、師匠のお宅にも行かない、文楽から完全に離れた生活が始まった。私は自分の可能性の範囲がどれほどの距離をもっているのかを探り始めた。そのときは挑戦したいものを思いつくままにしていたのだが、今思うと、規則性がある。むしろ、結局のところ、根底はまったく変わっていなかったということだろうか。

小説を書いて投稿した。
俳優のオーディションを受けた。
草臥(くたび)れるまで絵を描いた。
作曲をした。

これらの経験に加え、高校時代の経験を加えると、さらにはっきりと分かる。

三年間、文化祭において脚本･監督で劇を作った。
自主制作映画を作った。

私は、物語を表現したいのだ。

今でこそ分かることであるのだが、当時はまったく気付かなかった。

そんな私を再び文楽へと導いてくれた人がいる。

ひとりは芸能関係の方である。その方はご自身の分野のみでなく、あらゆる芸能のことに精通されていた。この方から二つの質問をいただいた。

「文楽で好きな演目は何か」
「文楽以外の演劇で好きな演目は何か」

文楽で好きな演目はすらすらといくつも出てきた。もちろん、それ以外に好きではない演目も頭に浮かんでいた。文楽以外で好きな演目は、たったの四つしか出てこなかった。頭に浮かんでいたのもそれだけだった。

瞬間、私は文楽以外の可能性を探っていたにもかかわらず、自分のしたいことばかりをして、他のプロの方の芸術を何ひとつ吸収していないことに気付いた。

そしてもうひとりは、幼稚園時代の恩師である。幸い私は尊敬できる方々に恵まれているが、この方は人生のすべてを尊敬している。私は二十歳になったときにその恩師に食事に誘っていただいた。先生は私が道に迷っていることを知らない。お酒を交わし、やがて、程よく酔い加減の先生はこう言った。

「おまえの十年後が楽しみや」と。

この二つのことが、私を文楽へ引き戻した。ゆえに、目下、私の目標は三十歳までにどれほどの文楽の芸を習得できるか、どれほどの他分野の芸術を吸収できるか、ということにある。

面白いことに、腹をくくって戻った後、自分の芸の力量のなさに驚き、文楽という芸能の相当な難しさに打ちのめされた。それまでの私は、舞台に出られれば良かった。舞台の上での快感と多幸感がすべてだった。「芸」のことなど小指の先ほども考えてはいなかった。それでは単なる自慰行為である。

それが、どうだ。

今は舞台が魔物のように恐ろしい。何もかもが壁である。乗り越えても平然とそこには次の壁が存在している。

そして、それに挑戦できることの幸福感といったら!

「挑戦そして前進」

私の座右の銘は「挑戦そして前進」である。これは、高校の頃の部活でのスローガンで、それ以後、私はこの言葉を胸に毎日を過ごしている。芸には、終わりがない。地平線よりもずっとむこう、宇宙の彼方へたどり着くほどの時間をもってしても、終わりはない。終わったと思うのなら、その時点でその人の成長は終わってしまったのだと私は思っている。

だから、「挑戦そして前進」は、初心に返るための戒めの言葉でもある。

あの、芸を舐めきっていた頃の恥ずかしい自分を思い出すための。

師匠方、兄弟子方の芸というものは、磨き上げられ続けている至高の芸である。未だ足元にも及ばない。地面の下へ潜ってしまいたいほどだ。文楽の芸というものは四百年の歳月を経た今でさえ、名人と呼ばれる人は口を揃えて「まだまだです」とおっしゃっている。

私は見てみたい。

純粋な修行の極致に見える、その「まだまだ」の世界の光景を。

そして、一生、「挑戦そして前進」し続けていきたい。

著者プロフィール

● 豊竹 咲寿大夫（とよたけ さきじゅだゆう）

文楽の太夫。平成元年9月7日生まれ。平成14年4月、豊竹咲大夫へ入門。同12月、豊竹咲寿大夫と名乗る。平成17年7月、国立文楽劇場にて初舞台。現在に至る。
ブログ「さきじゅびより」 http://ameblo.jp/sakiju/

クローズアップ！ 教育の現場

未来に輝く子どもたちのために

～熊本市の不登校対策「ユア・フレンド事業」～

熊本市教育委員会事務局総合支援課教育相談室　指導主事　中島 幹記

現在全国の不登校児童生徒数は11万人を越え、不登校の問題は大きな教育課題の一つとなっている。本市においてもここ数年、600人を上回る児童生徒が不登校状態にあり、学校現場を中心に様々な対策がなされているが、その中でもこれまでの不登校対策とは異なる視点で取り組むユア・フレンド事業がある。

熊本市のユア・フレンド事業とは

ユア・フレンド事業は、平成14年度に熊本市教育委員会と熊本大学教育学部が連携協力して行う不登校対策としてスタートした。

本事業は、大学との連携という点でも全国から注目されているが、何と言っても特筆すべきは、他の不登校対策とは趣を異にするその目的「児童生徒と年齢の近い大学生を学校や家庭に派遣し、学生が話し相手・遊び相手となることで、子どもたちの心の居場所などをつくる」にある。つまり、ユア・フレンド事業とは、学校復帰を目的とせず、不登校となった児童生徒の『心に寄り添う』活動なのである。

ユア・フレンドの派遣依頼は、まず保護者から学校を通して行われる。その後大学から推薦を受け、登録した学生を、状況に応じて熊本市教育委員会が各学校・家庭に派遣する形をとっている。これまでの成果としては「子どもの表情に笑顔が出た」「外出ができるようになった」等の報告が多数あがっている。また、「毎日ではなくとも登校できるようになった」「教室に入ることができるようになった」等の報告もあり、本事業が熊本市の不登校対策としていかに重要な役割を担っているかが分かる。

学生たちの「意見交換会」

昨年度（平成25年度）のユア・フレンド登録学生数は180人、総派遣回数が1978回にものぼる。その活動を支えているのが、学生たちに対する研修会の存在であり、その中でも年間２度実施する意見交換会は、活動をしていく中での悩みや考えを学生たちが出し合い、自らの活動を見直す貴重な場となっている。会の中では、「自分が自然体でいた方が、子どもが緊張しない」「相手を理解しようとする気持ちが大切」という学生自身の学びや、「半年間で20回の訪問を行ったが一度も子どもと会うことができなかった」等、粘り強く活動を行う学生の姿に触れることができる。こうした学生の一つ一つの発言に教育委員会職員・大学教授が耳を傾け、アドバイスをおくる風景が見られるのも、この研修会の特徴の一つと言える。

【意見交換会班別協議の様子】

熊本市の子どもたちのために

現在活動を行っている学生の大半は、将来教職の道へ進んでいく。このユア・フレンドでの経験が、子ども一人ひとりの思いに寄り添う教師としての資質を高め、それがやがて本市の教育を支えていく力になるものと確信している。未来に輝く熊本市の子どもたちのために、今後も本事業のさらなる充実発展に全力で取り組んでいきたいと思う。

教育情報　No.7

日文教育資料

平成 27 年（2015 年）1 月 1 日発行

編集・発行人　佐々木秀樹

発行所　日本文教出版株式会社
〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33258

日本文教出版 株式会社
http://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社　〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261　FAX:06-6606-5171

東京本社　〒165-0026　東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611　FAX:03-3389-4618

九州支社　〒810-0022　福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696　FAX:092-521-3938

東海支社　〒461-0004　名古屋市東区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260　FAX:052-979-7261

北海道出張所　〒001-0909　札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201　FAX:011-764-0690